

4 植調剤によるイチジク上位節果実の熟期および肥大促進

ねらいと成果

イチジクは、結果枝上段の果実ほど小玉で、成熟が遅いため11月以降は降霜によって収穫できなくなることが多い。そこで、植調剤処理による果実肥大促進とあわせて熟期促進について検討した。

果実肥大促進には合成サイトカイニン様物質であるKT-30S（商品名フルメット、以下KTと略す）、熟期促進にはジベレリン（以下GAと略す）の果面噴霧処理が有効である。

内容

イチジク「柵井ドーフィン」を供試した。1999年は7月28日に6年生樹の10節以上の果実に、2000年は8月18日に3年生樹の15節以上の果実にKTとGAを果面噴霧処理した（1枝につき7～8果）。

1. KT 50ppm 処理は果実肥大を著しく促進し、果実は若干横長になった（表1）。
2. GA 100ppm 処理は無処理に比べて明らかに熟期が促進し（図）、果実はやや縦長になった（表1）。
3. GA 100ppm と KT 20ppm または 50ppm の混

表1 植調剤処理が「柵井ドーフィン」中上位節の果実品質に及ぼす影響(1999年)

試験区	果実重 (g)	横/縦比率 (カラーチャート)	果皮色	糖度 (Brix)
GA100ppm	79.9 c ¹⁾	0.84 c	6.9	16.8 ab
KT50ppm	106.3 a	1.04 a	6.9	16.5 b
GA100+KT50	98.3 b	0.94 b	7.0	16.1 b
無処理	84.7 c	0.99 ab	7.2	17.4 a

1) アルファベットの異符号間には5%水準で有意(Tukey)

用処理は熟期と果実肥大を促進し、上位節の収量が無処理に比べ大幅に増加した（表2）。

4. 1999年は晩秋が高温で、11月中旬まで収穫できたため、最終の収穫果率には処理による差がほとんどみられなかったが、GA 処理区では早期に収穫できる果実の割合が高かった（図）。一方、2000年は収穫終期が11月上旬で、各処理とも無処理より収穫果率が有意に高かった（表2）。
5. KT、GA 処理により、着色、糖度がやや低下する傾向があった（表1、2）。

従来からの熟期促進法であるオイリングやエセフォン処理は、同一枝上で一度に2～3果程度しか処理できないが、KT、GA は1回に処理できる果数が多く、処理の省力化につながる。

今後の方針

着色や糖度の低下を招かない、より低濃度での処理や様々な生育ステージでの処理を検討し、農薬登録に向けた実用化試験を実施する。

真野 隆司（中央農技・園芸部）

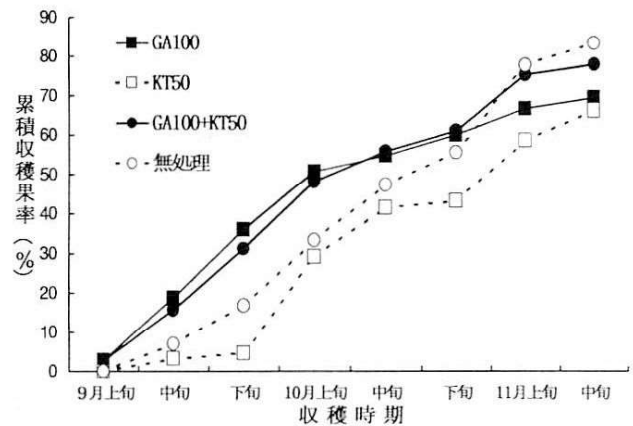


図 植調剤処理が累積収穫果率に及ぼす影響(1999年)

表2 植調剤処理が「柵井ドーフィン」上位節の収量、果実品質に及ぼす影響(2000年)

試験区	収穫始 ¹⁾ (月日)	収穫終 ¹⁾ (月日)	収穫果率 ¹⁾ (%)	収量 ¹⁾ (g/枝)	果実重 (g)	果皮色 (カラーチャート)	糖度 (Brix)
GA100ppm	9.14	11.3	55.7 a ²⁾	367 b	88.9 b	6.8 b	16.1 ab
GA100+KT50	9.14	11.2	63.8 a	459 a	99.2 a	6.9 b	15.7 b
GA100+KT20	9.14	11.2	60.7 a	433 a	96.3 a	6.7 b	16.0 ab
無処理	9.26	11.5	23.4 b	162 c	86.4 b	7.4 a	16.7 a

1) 調査対象は15節以上の果実

2) アルファベットの異符号間には5%水準で有意(Tukey)